

上野
由
岐
子

帰還。
物語は続いていく

5

Yukiko Ueno
Age 34
Softball

「再び五輪の舞台に」

「誰のために投げるのか」

北京の金メダル獲得を最後に五輪競技から外れたソフトボールが、2020年東京で復活することになった。目標を失いながらも投げ続けてきたエースは今、何を思うのか。

矢崎良一 = 文 中井采央 = 写真

text by Reiichi Yazaki photographs by Naon Nakai

北京五輪決勝トーナメント。マウンドに立つ上野由岐子はまさに鉄腕だった。

。世界最速、MAX121kmの豪速球と、この五輪のために習得したシュートを駆使し、米国、オーストラリアの強打者たちをバットバッタと薙ぎ倒していく。2日間で3試合413球を一人で投げ抜き、日本に悲願の金メダルをもたらした。

しかし、登り詰めた頂点は、長い冬の始まりでもあった。この大会を最後に、ソフトボールは五輪種目から除外される。大目標を失ったことで、ソフトボールを取り巻く環境は急速に熱気を失っていく。

あれから9年。上野は所属するビックカメラ高崎のエースとして、今も日本リーグで投げ続けている。昨春秋には史上初のリーグ通算200勝という大記録を達成。ただ最近では、格下と言っている選手たちに痛打を浴びる場面も増えた。何年か前なら、鼻歌を歌いながら投げていた相手だ。上野はそんな状況を、「楽しい」と言っていて笑う。

「日々全力、つくぐらいに必死です。ただんだん身体のキレもなくなるし、試合前にアップしても重たいなって感じますから。前みたいに手を抜く余裕がなくなってる。もう34歳ですから(笑)。歳とったなあって本当に思いますよ。思うけど、投げられないって感じは全然ないです。たまに

延長戦なんかになっても、疲れてる感じはなくて、また2、3イニングは投げられる。スタミナも集中力も全然行けるな、と。

でも、(気持ちの面では) あんまり一生懸命投げてないんですよ。感情がなくなってきたというか。以前のほうが感情入ってピッチングしていたから、すごくムラがあったんです。すぐ諦めちゃうか、みたいな。そういう感情の浮き沈みの影響が大きかったですね。今は結構淡々と投げられていますね」

9年の間に選手は入れ替わり、後ろを守るピッチカメラ高崎の野手陣も経験の浅い若手がほとんどになった。北京五輪の代表チームのような鉄壁の守備や、打線の援護は望むべくもない。上野はマウンドで鼻歌は歌わないかわりに、心の中の自分との会話を楽しむようになった。「やべえ、打たれちゃった」「点取られちゃったよ」「まあ、2点ならいいか」……と。

「周りに期待していません」とスパッと切り切る。言葉は厳しいが、そこに悪意はない。「期待すると、感情が入っちゃったり、気持ちが動いてしまう」からだ。ダメで元々と思っていれば、チャンスで誰かがヒットを打って点が入れば「うわあー、ラッキー」と素直に喜べて、ポジティブな気持ちになれる。エラーしても何も思わない。逆にファインプレーが出たりすれば、「おっやるねえ」と自分も乗って行ける。「期待すると、(良いプレーが) 出来て当たり前前という、それが標準に自分の意識がなってしまう。それでエラーなんかされたらイラッとしちゃう。だから、期待しないんです。もちろん信頼はしているから、キャッチャーに「打たれたのはこういうこと

だから、ちゃんと勉強しろ」とか、野手にも「バッターを研究して、もう少しポジシヨニングを考えなさい」とアドバイスしたりしますよ。試合の中で絶対にしちやいけないエラーというのもあるから、そんな時には言葉もキツくなります。でもべつに本気で怒ってるわけじゃない。そうやって成長していつてもらうしかないし、向こうも私が庄を掛けな分、ノビノビやれているんじゃないかな」

刺激求めて葛藤し続けた9年間でもあった。北京五輪のチームメイトたちは一人また一人と現役を退き、今も第一線でプレーしているのは、上野の他には、女イチロー、こと山田恵里(日立)と、かつての女房役だった捕手の峰幸代(トヨタ自動車、一度引退するも16年に復帰)の2人だけ。もちろん上野も引退を考えなかったわけではない。20代後半の時期、「寿引退が理想なんですけどね」と冗談めかして言っていたことがある。だが、試合会場に行けば、サインを求める小中学生が列を作って待つ



北京五輪では準決勝でアメリカ戦の延長9回、決勝進出決定戦でオーストラリア戦の延長12回、決勝アメリカ戦の7回をすべて完封。2日間合計413球を投げた

「2020年になったら、さらに負けられない試合になるわけだから」

いる。実力、人気、あらゆる面で、上野なくして日本のソフトボールは成り立たなかった。

親と同じように思える人。自分も行くしかない。

風向きが変わったのが2016年8月。IOC総会において、2020年東京五輪での野球・ソフトボール競技の復帰が正式決定する（開催都市提案の追加種目として実施）。ソフトボールは金メダル有望種目。上野の周辺にもわかに騒がしくなってきた。

そんな折の今年5月、上野はNHK「サングラススポーツ」の企画で、女子レスリング五輪4連覇の伊調馨と対談する機会を得た。放送されたのは10分程度だったが、高崎のグラウンドを訪れた伊調と2時間以上話し込んだという。

「久々に違う競技の人と対等に、同じレベルで話が出来た。すごい刺激になりました」

上野は楽しそうにそう振り返る。番組の中で東京五輪へのモチベーションについて聞かれた上野は、「誰かのために頑張る」と口にしてはいる。「誰か」とは、特定の人物を指しているのか？ だとしたら、それは誰なのか？ そんな疑問に、上野は即答した。

「任さんです」

任さんとは、昨年、日本代表ヘッドコーチに就任し、東京五輪でチームを指揮することになる宇津木麗華のことだ。中国から日本に帰化した麗華は、今も親しい選手や関係者からは、中国時代の名前である任彦麗から、「任さん」と呼ばれている。

「任さんがいなかったら今の自分はない。そう言えるくらいに感謝しているし、尊敬もしています。いろんな意味で、親と同じように思える人。だから、任さんが代表監督をやるのであれば、自分も行くしかない。」

任さんのために。そういう気持ちですわ」

目標を失って苦しむ上野の気持ちを理解し、すぐ近くにおいて支えてきたのは、所属チームで監督を務める麗華だった。麗華は上野を「ソフトボール界の宝」と公言し、抜群の運動能力を誇る上野にシヨートを守らせたり、バッティングに挑戦させて4番を打たせたり、チームのトレーニングコーチに就任させて選手の指導を任せたりもあつた。いずれも上野の心に刺激を与えるための施策で、そのためには目先の試合の勝敗を度外視することもあつた。



Yukiko Ueno

1982年7月22日、福岡県生まれ。九州女子高（現・福岡大附属若葉高）を経て日立高崎（現・ビックカメラ高崎）所属。日本代表のエースとして北京五輪では準決勝以降の3試合に完投して金メダル。12、14年の世界選手権連覇。昨季は史上初の日本リーグ通算200勝を達成。174cm

てやってきてくれている。日本の女子ソフトの歴史、途切れていたオリンピックの歴史が一本の糸で繋がった。それがすごく嬉しい」

麗華率いる新生日本代表は、この夏、正式にスタートを切った。国際試合などで時折見せる脆さに、チームの成熟度の低さが窺い知れる。ここでも上野は、自チーム同様、周囲に厳しい視線を向けている。

「今の代表チームは若手主体で、正直、まだ日の丸を付けるようなレベルの選手たちじゃない。これ、はっきり書いてもらっていいですよ。逆に、本人たちにそういう自

こうした麗華の想いを、麗華が日本に帰化するきっかけを作り、その麗華を日本代表の4番打者に据え、シドニー、アテネと2度のオリンピックを戦った宇津木妙子元監督はこう話している。

「任も同じ道を歩いてきたから。シドニー五輪が終わって、任はやめる（現役引退する）つもりだった。でも、私が監督を続けることになって、監督がやるなら、監督に金メダルを取らせたい」とアテネまで頑張ってくれた。時代がひと回りして、今度は上野が「任のために」という思いを持つ

覚を持つてほしい。選ばれたから凄いいんじやなくて、他にいないから選ばれてるだけなんだから。本気で勝ちに行くなら、ベテラン選手がもっと入ってきてますよ。3年後、その子たちが25歳前後のいちばん良い年代に来るのを想定しているってこと。経験をさせないと上手にならないから。そうやって今はまだチームの土台作りをしている段階なんで、むしろ結果を求められるほうが苦しい。今年、来年くらいまでは、そういう苦しい状況が続くと思う。

でも、べつに周りの声を聞く必要はない。

勝たなきゃいけないのは今じゃないから。今、どれだけ叩かれようが、最後に勝てばいい。そのための今の負け。負けられる時には負けておかないと。これが2019年とかになると、もう負けられない。2020年になったら、さらに負けられない試合になるわけだから。そう考えたら、負けられる時に負けておく。打たれてもいい時に打たれておかないと、反省も出来ないし、準備も出来ない。最後に勝つために今は負けておけばいいって私は思ってるんです」

上野の目は東京五輪の決勝戦のマウンドを見据え、逆算を始めている。そんな上野の姿を頼もしく思いながら、宇津木妙子はこんなエールを送っている。

「いろんな個人の思いがあつたとしても、それはそれ。オリンピックという舞台には、最強チームで挑まなくてはいけない。上野も2020年には38歳か？ もう体力的なピークは過ぎていくわけで、全体のことを考えたら取って代わる選手が出て来てなきやいけない。ただ、私は私で、任に対する思い、上野に対する思いがある。だからこそ、一人の日本のソフトボールを応援する人間として、上野にそこに立ってほしい。そう願っているし、信じている」

会話の中で、上野は何度も「もう34歳ですから」と口にする。7月生まれの上野は、もうすぐ誕生日を迎える。今度は「もう35歳ですから」と言うのだろうか。しかし2020年が近づくとつれ、「もう」は「まだ」に変わっていくような気がしている。そしてオリンピックが目前に迫った頃、「まだ38歳ですから」と笑う上野の姿を想像してしまう。

上野由岐子が「もう」から「まだ」にギアを上げた時、日本のソフトボールの新しい歴史が動き始めるはずだ。